寺町散歩（５）東雲山理薬院浄安寺

史談会幹事　村崎春樹

浄安寺は、三宝寺と興福寺に接しており山門は石段にて一段高い位置に在る。浄安寺開基は元和年間（1615～1623）に唐津の清涼山浄泰寺第三世源蓮社本譽上人の弟子であった誓譽である。誓譽は、唐津からまだ根強く吉利支丹信徒がいた長崎の東、風頭山の麓、長崎代官の支配地であった長崎村伊良林郷字中ノ平（現在の寺町）の現在地に開蒼庵と称する草庵を結び、仏教の布教を行い多くの信徒を得た。庵が手狭となった為、寛永元年に時の長崎奉行長谷川権六に願って一寺を開き東雲山理薬院浄安寺と称した。また薬師如来を本尊としていた。閉創以来、唐津の浄泰寺の末寺で在ったが、享和元年（1801）6月に京都の総本山である知恩院の直末となった。弘化2年（1845）秋、徳川幕府役人の宿舎として利用され、翌3年秋には幕府徒士目附の宿舎となった。嘉永6年（1853）12月8日から翌年7年正月8日までは御勘定組頭中村為弥の宿舎となり、明治10年（1877）4月16日から10月4日まで本堂および庫裡には西南戦争による傷病者のための臨時病棟が置かれた。浄安寺の現今本尊阿弥陀如来坐像は寶暦10年（1760）8月大音寺住持によって大音寺の本尊が寄附されたものである。薬師堂本尊は、聖徳太子八歳の作と伝えられている薬師如来像である。観世音菩薩像は、大正10年（1921）の長崎市史調査時には三体と記されているが、現在は二体が確認されている。勢至菩薩立像も観世音菩薩像同様、市史調査時には二体とされてるが、確認されるのは一体である。他には阿弥陀如来像がある。境内には、本堂、薬師堂、庫裡、鐘楼門、納骨堂等がある。本堂の格子天井には、嘉永3年（1850）18代住持映譽徳風の描いた花卉彩色の絵がある。同じく本堂の天井には凧好で有名であった浄安寺十三代住持 住譽津那が揚げた婆羅門（バラモン）の複製が在る。この婆羅門を揚げる様子は長崎名所図絵にも紹介されている。この婆羅門のオリジナルは浄安寺現住持によると破損がひどく廃棄されたとの事である。本堂の外正面には東雲山の大額がある、この大額は清国兵部尚書潘世恩の筆で、長崎の唐繪目利で長崎画壇の中心的な存在であった石崎融思が刻したものである。薬師堂は、本堂左側の一段高く在るが開基誓譽が創建し、七代住持心譽の時に改築、更に安政2年及び弘化2年、大正10年の改築と修理を経た旧薬師堂は、昭和34年に解体され、現在は新薬師堂が建っている。薬師堂内には聖徳太子作と伝えられる薬師如来像が在る。長崎市史に記されている観音堂は無く、今は約骨堂が跡に建っている。鐘楼門は、三代往持然譽の創設で明治11年（1878）、大正10年（1921）に修理されたが、昭和62年（1987）新らたな鐘楼門新設に伴い解体された。なお旧鐘楼門上部にあった梵鐘は大平洋戦争の時に供出され、現在は新鋳された鐘がある。

歴代住持

開基	誓譽了山	二代	栄譽順的
三代	然譽良果	四代	授譽学山
五代	攝譽	六代	学譽法順
七代	心譽嶺傳	八代	稟譽心廓
九代	澤譽利海	十代	津譽實問
十一代	實譽津梁	十二代	瑞譽門應
十三代	住譽津那	十四代	元譽
十五代	但譽示道	十六代	輪譽貞隆
十七代	貞厳	十八代	靜譽善苗
十九代	映譽徳風	二十代	忍譽是海
二十一代	詮譽俊長	二十二代	編譽愚徳
二十三代	隣譽民暁	二十四代	天譽民肇
二十五代	秀文	二十六代	忍譽（現住持）

浄安寺後山には、麹屋町の傘鉾を一手持ちした、かさぼこ町人池島家の墓がある。文政五年（1822）本石灰町組頭を務めた吉田家、オランダ通詞小川慶右衛門が建てた小川家の墓、また浄安寺過去帳の一番目に記載されている泉屋家の墓もある。

お詫びと訂正のお願い

10月号No.37、P2「三宝寺」の記事が編集ミスで、内容が前後していました。同封の別紙とお差替えください。御手数をかけて申し訳ありません。編集子